巻頭インタビュー

今考えたい、国際協力と国際情勢（下）

佐藤都喜子
名古屋外国語大学副学長

リプロダクティブ・ヘルスへの興味

――国際協力機構（JICA）でケニアでのプロジェクト（前号参照）の後、どのようなプロジェクトに関わられたのですか。

佐藤　ケニアでのプロジェクトが一段落し、いったん日本の本部に戻りました。しかし、私は海外でプロジェクトを担当したいという気持ちがとても強く、帰国後数年以内には、また海外に出ようと思っていました。そうしましたら、ヨルダンで非常に興味深いプロジェクトができそうだという話を聞きました。しかも、それが自分の興味分野である「リプロダクティブ・ヘルス」に関するものでした。リプロダクティブ・ヘルスとは、「生涯にわたる女性の健康」という、その当時登場したばかりの新たな概念でした。女性の健康といえば、「母子保健・家族計画」に象徴されるように〝産む性〟としてのケアに注目する傾向があったのですが、これに異議を唱えたのがリプロダクティブ・ヘルスでした。しかも、それに女性のエンパワーメントが加わった提案がヨルダン政府側から出ていると

（さとう・ときこ）米国ハワイ州にある米国立東西センター人口研究所奨学生として、ハワイ州立大学大学院博士課程修了。博士（Ph.D.）。国際協力機構（JICA）の国際協力専門員としてケニアに４年半、ヨルダンに12年間近く滞在した経験を含め、20年以上にわたる途上国支援の経験を経て、現在、名古屋外国語大学副学長・現代国際学部国際教養学科長（兼任）。（公財）味の素ファンデーション「『食と栄養』国際支援プログラム」の「食と栄養支援委員会」委員長。著書に『現代ヨルダン・レポート』（名古屋外国語大学出版会）他。

いう話で、類似のプロジェクト経験のある私にそのリーダーになってくれないかという依頼がきました。

当初、中東は嫌だなって思っていました。どのようなところか全然知らないですし、日本の世間一般の人たちが中東に対するある種のイメージを持っているのと同じような偏見を持っていました。それに、テーマが女性のエンパワーメントとか家族計画とか、現地の価値観から考えると物議を醸すかもしれない内容ではないかと思い、いったんはお断りしました。

でも、よく考えたら、新たな概念として登場したリプロダクティブ・ヘルスをこれから盛り上げるのには、とても良いプロジェクトじゃないかと思い直し、引き受けることにしました。本部の担当部署の責任者からは、「石を投げられたらさっさと戻ってきていいよ」って言ってもらえて。それでなんかすごく気が楽になって、「よし、やったるで」っていう気持ちになりました。

ヨルダンでのプロジェクト

――ヨルダンに赴任され、実際はどういう感じで、どんなことを心掛けましたか。

佐藤　最初の1カ月間は全然うまくいきませんでした。なぜなら、ケニアで得た経験をそのままヨルダンに持ってこようとしたからなんです。学生時代の学びを通して、私はみんなと協調しながらやっていくのが大事だと思っていたので、ケニアに赴任した当初は、ケニアの人たちに「あなたのご意見は?」ってよく聞いていたんです。そしたら、ある時にケニア人のカウンターパートが「You don't have any opinion」って言うんですよ。あなた方の考え方を反映させて結論に導こうと思っていたのに、「何でそんなこと言うの?」という感じでした。「だったらいいわ」と思い、私も自分の意見をどんどんと推すようにしたら、ケニアではうまくいくようになりました。

ヨルダンでも最初はその調子でやりましたら、皆なぜかフンって知らん顔するんです。なんでうまくいかないのか、本腰を入れてヨルダン人を理解する必要があると思い、1カ月は自分の意見を言わずに、ヨルダン人同士の会話や行動を観察したんです。すると、気候的にドライな国だからドライな人たちかと思っていたら、すごくウェットな感情を持っている人たちで、人間関係にすごく気を遣う人たちだということが分かりました。それと同時に自己主張も強かったです。

そこで、私は作戦を変えて、自分の意見を言う前にまず「あなた方はどう思いますか?」って先に聞いてから、「でも、私はこんな意見を持ってるんです」って言うようにしたんです。そしたら、「いいんじゃない、あなたの意見で」とうまくいくようになりました。要するに、自分の意見を聞いてくれたというプロセスが大事だったのです。

また、保守的な地方に行ったときは、言葉遣いに注意し、相手の文化を尊重するという姿勢で、住民に受け入れられるよう努力しました。地方では、まず地域の部族長宅で住民を対象にプロジェクトの説明会を開くというのが大事なんです。そこでプロジェクトリーダーである私が挨拶を兼ねて説明するのですが、まず、「私たちはあなた